武蔵野日曜聖書講筵　聖霊降臨節祈祷会
これ何事ぞ
――使徒行伝第２章１～13節――

１９７８年５月14日
小池辰雄

祈りとは魂の呼吸　十字架は一つ　心を一つにして　これ何事ぞ　本質即現象の根源現象

【使徒行伝２】

1五旬節の日となり、彼らみな一処（ひとところ）に集い居りしに、2烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、3また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人（おのおの）のうえに止まる。4彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣（の）べしむるままに異邦の言（ことば）にて語りはじむ。

5時に敬虔（けいけん）なるユダヤ人ら天下の国々より来（きた）りてエルサレムに住み居りしが、6この音おこりたれば群衆あつまり来り、おのおの己が国語（くにことば）にて使徒たちの語るを聞きて騒ぎ合い、7かつ驚き怪しみて言う『視よ、この語る者は皆ガリラヤ人ならずや、8如何にして、我等おのおのの生まれし国の言をきくか、9我等はパルテヤ人、メヂヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジヤ、10フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近き地方などに住む者、ロマよりの旅人――ユダヤ人および改宗者――11クレテ人およびアラビヤ人なるに、我が国語（くにことば）にて彼らが神の大なる御業をかたるを聞かんとは』12みな驚き、惑いて互に言う『これ何事ぞ』13或者どもは嘲りて言う『かれらは甘き葡萄酒にて満たされたり』

●祈りとは魂の呼吸

集会は祈りが大事なので、祈りが無い集会は「画竜点睛（がりょうてんせい）を欠く」ということですね、「九仞（きゅうじん）の功（こう）を一簣（いっき）に虧（か）く」ともいう。

イエスはどういう人であったかというと、一言でいうと、祈りの人です。預言者も使徒もみんなそうです。「祈り」とは神との霊的交通のことです。霊的交通とは魂の呼吸。私たちの肉体は無意識的に呼吸して、空気を吸って生きている。魂も無意識的にキリストを生きる。

「聖霊に生く」

と午前の集会で話しましたが、これはいくら説明しても、どうにもならんです、本当に呼

吸しないことには、祈らないことには。ペンテコステ的な現象は御承知の通り、今読みました使徒行伝2章です。この特別な相対的な歴史の中に、絶対的なものが切りかかってきたところの、本当に一回的なでき事です。しかし、この一回的なでき事は一回で終らない。世の末までも、我々一人びとりが、この決定的なでき事を自ら体験しないことには、神の生命、キリストの生命の中には入れない。エミール・ブルンナー〔Emil Brunner（1889～1966）はスイス出身のプロテスタント（改革派）神学者であり、カール・バルトと共に弁証法神学運動の草創期を担った新正統主義の代表的神学者〕という人が、『教会の誤解』という本に非常によく書いているんですが、

「キリスト者であるということは、原始のキリスト教の世界においては、霊において、御霊において生き、また動くということであった。ところが今は、キリスト者であるということは、教会に属しているとか、あるいは教会法また教会組織に、いろんなそういったものに切り換えられている」

というようなことを彼は言っています。霊の、御霊の共同体の代りに教会のいろいろな組織というものができ上がってしまった。パウロの時にややもすると、パウロの教会がその第一歩を誤り踏み出そうとしている面があった。そこでパウロはいろいろ戒めているわけです。

「教会がそういった組織化、形式化したから、それはだめだ」

というわけで、内村鑑三先生が「無教会」というのを始められた。けれども、今度は形が無いのがいいんじゃない。どうせ人間のすることは相対的ですから、形があろうが無かろうが問題は、

「本当に活ける姿であるか」

と、それだけが問題です。ある時は、やむを得ずしてそんな組織もできるかも知れない。組織そのものが悪いのでも何でもない。それが一番大事なものとすり変わっているから悪い。切り換わってないで大事なものがあれば、組織があろうが無かろうが、それは問題ない。ちょうどパウロが、

「割礼を受けようが受けまいが問題ない。信仰だけだ」

と言ったけれども、我々が本当に問題にしなければならないのは、

「そこにキリストの霊が、御霊のキリストが本当に内住しておられるか」

ということ。ただ仰いでいるのではない。「信仰」なんていって信じ仰いでいたのではしょうがない。始めは仰ぐでもいいですよ、そのうち「信交」、交わらなくては、それから最後には「信行」です。そういう信交また信行、交わりまた行動するということは如何にして可能か。これはキリストの力が来なくては。いつも

「根源に帰る」

ということは、

「マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書に帰る」ということです。これは一番生まの現実なんです。福音書のキリストと直結してきた使徒行伝、そのように生きる。それを告白しているのはパウロ、ヨハネ、ペテロ、ヤコブの書簡、これは告白だ。告白でなくてそこに生きている姿は使徒行伝で、その一番生まの源泉は四福音書です。だから、四福音書を集会でやれば、毎回がペンテコステなんだ、本当は。ただキリストは直にペンテコステをやっているけれども、弟子たちはペンテコステができない、福音書では。それはまだ十字架を通っていないから。キリストと弟子たちは次元が全く違うんです。その次元が全く違ったのを、今度は同質次元にやってきたのがこの使徒行伝です。

だから、福音書のキリストに降参する。降参する一番の焦点は何かというと、福音書の終りの方に出てくるところの十字架のキリストです。十字架のキリストに参らなくては、いつまでたっても聖霊の世界に入れない。己を捨て、審判で私たちどうにもならないやつの代りになって贖ってくださったこの十字架の愛というものの前に、いい加減な顔していたのでは聖霊の世界になんか絶対に入れない。

「参りました！　ありがとうございます！」

ということなんだ、この十字架というのは。こんな驚くべき愛には降参せざるを得ない。そして過去・現在・未来の自分というものは、もはや問題でない。潔いの潔くないの、正しいの正しくないの、何のかんのと、人間の側のそんな判断はいらないんです。

私に立派であることを要求する人は躓きます。私はキリストの他、自分を問題にしないんだから。藤井先生も言ったね、

「私を誉めたり、貶したりする者と、私は関わりがない」

と。その通り。あなた方と私の関係は、キリストにおいて関係しているのであって、直接の関係はない。

本当に私は自分を問題にしてないんですよ。

「自分がどうである、こうである」

なんて、そんなものは百年経ったってどうにもならんもの。キリストが、

「現在も過去も未来も、もう心配いらん」

と。絶対ということは本当に絶対なんですよ、絶対恩寵ということは。私たちの肉体にとって空気は絶対的存在でしょ。キリストの贖いの事態は、とにかく私にとっては絶対なんです。これはもう仏教でいうならば、親鸞の信仰、『歎異鈔』です。

そのように十字架というのは、パウロやヨハネが霊界で見たところの、

「今もなお屠られたる如き羔」

という、このキリストの、イザヤ書53章が預言しているところの事態です。今も全世界はこのキリストをいい加減にしている。そして神を蔑にしている。20世紀はキリスト教国と

いえども。まぁ世界は本当におかしなことになったね。羔の怒りが来るよ。もうそれは聖書に書いてある通り、天地晦冥（かいめい）として星が落ちて何とかかんとかと、ああいう表現でいわざるを得ないような事態なんです。もう本当に終末的現実ですよ、今は。いつ審判が来ても文句のないところの現実が１９７８年の今です。日本に問題が山積みしているというけれども、問題中の問題は日本人の心の問題なんです。経済問題でも何でもないんだ。政府が悪いのでも何でもない。国民それ自身の、一人びとりの心なんです。

●十字架は一つ

彼らは十日間、心を一つにして祈っていたという。何ですか、

「心を一つにして祈る」

というのは。もうギリギリなんです。キリストは十字架にかかって、復活して天界に往ってしまった。残された者は一体どうしてくれるんだと。だけれども、キリストは、

「今に待っていろ。約束の霊が来るぞ」

と言われた。これはキリストの霊ですよ。旧約の霊とは違う。エホバの霊との直結の世界でなくて、私たちにとってはキリストの霊です。キリストに宿った霊でなければ、我々には聖霊とは言えない。十字架を経たところのキリストの霊が、これが私たちを本当に新たなる新人にするんです。

「人新たに生まれずば」

とキリストが言われたのがそのこと。新生するわけだ。「心を一つにする」とは、

「さぁひとつみんな同じ心になりましょう」

と言ったって、それは無理だよな、そんなことを観念したって。十字架だけが心を一つにするんです。

「参りました、降参しました！」

といって、十字架を受けとった時に心は一つなんです。

「御霊は一つ、バプテスマは一つ」

と、エペソ書に書いてあるが、

「十字架は一つ」

とはあそこに書いてないね、私は書きたいんだ、「十字架は一つ」と。パウロは落としてしまっている。エペソ書４章４節、

「4**体は一つ、御霊は一つなり。汝らが召しにかかわる一つ望みをもて召されたるが如し。**5**主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、**6**凡（すべ）ての者の父なる神は一つなり。神は凡てのものの上に超在し、凡てのものを貫在し、凡てのものの中に内在したもう**」（エペソ４・４～６）

と、大胆な言い方をしているね。神さまが超在、貫在、内在、遍在、常在している。神さ

まはどうしてこうなり得るんですか。御霊の神だから、神さまは超在、貫在、内在、自由自在です。こういう聖書の言葉を読んでね、ウワーッとそういう世界に入らなければダメですよ。「そうか」なんて言って、頭で「そうか」ではないですよ。

そういうのが一如というんです。キリストに在るところの神秘、一体です。神秘家の最大なるものは誰ですか、イエスじゃないですか。神さまと一つになっている。こんな偉大な神秘があるんですかね。

「我を見し者は父を見しなり」

と。気狂いでなければ言えない言葉だ、普通の人間だったら。

「我と父とは一つなり」

一如なんだ。どうしてそういう言葉をいい加減にするんでしょうかね。父の奥にはキリストがいる、キリストの奥には父がいる。パウロの書簡を見たってそうなんです。

「キリストわが内に在すなり」

なんて。キリストは天界にいるのに、どうして、

「御霊の主が、主の御霊がわが内に在すなり」

なんてパウロは言うんですか。そんなことといちいち理屈をもってパウロは言ってやしない。ドラマティックな有機体的な構造というものはそんなものじゃないです。

●心を一つにして

1 五旬節の日となり、彼らみな一処に集い居りしに、2 烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、3 また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止まる。4 彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ。

そのように、「彼らは一つになって」というのは、本当に平伏しにおいて一つなんです。いわゆる人間的真実じゃない。人間の真実なんてまだ考えているうちはだめです。

「真実はキリストだけで、我々は偽りである」

なんて、パウロが言ったじゃないですか。相対的な人間の徳なんていうものは問題じゃない。キリストが本当に「無者」となって、自分を何者ともしないで、神一切となって、そして本当に聖意を受けとって、本願を受けとって、ウワーッと動いていた。これが本当の天衣無縫の自由なんです。霊的必然で動いている。ざるを得ないで動いている。私たちはこの十字架で吹っ飛ばされているから、だから、その真空の中には聖霊が入って来ざるを得ない。

そのようにして根源状況になって、

「もうどうにもならないで祈っていました」

ということだ、「心を一つにして」ということは。八方塞がり、八方破れ。ただ天界だけが天裂けて御霊が降る。そうしたらば、もう贖いとってくださったキリストが、「よし」とい

うわけで、この聖霊が降って来た。御霊においてキリストが降ってきた。聖霊降臨です。

使徒行伝2章がキリスト教の歴史の始めなんです。始めはこれ本当に凄いんです、この現象は。皆さんは無教会でも教会でも、プロテスタントでもカトリックでもない。キリスト直結で行こう。問題はキリスト直結、使徒的信仰で行きましょう。それだから楽しくってしょうがない。

「パウロさん、ペテロさん、ヨハネさん！」

と、天界に向かって友達のように呼びかけてくださいよ。

「パウロ何者ぞ、アポロ何者ぞ、ペテロ何者ぞ。キリストの他に何を問題にするか」

と、パウロ自身が言っているんだ。

「キリストは分かたるるものならんや」

と。彼らはそのようにして、のっぴきならないギリギリの現実に祈っていたら、俄然、聖霊が臨んできた。全く新しい現象が起きてきた。それでもって一人びとりに火がついてしまった。さっきから申し上げている「火」というのは、「霊」という字を書きます。火がついたというのは、霊がついたということなんだ。同じことだ。両方とも「ひ」と読むから。いいですか、皆さん、私たちはこの「火」を見たら、こっちの「霊」を思い出さなくては。霊火です。霊で結構なんだ。天に向かって両手を上げて祈っている姿、そうすると「火」になる、霊になる――それは譬えをもって言っているんだけれど――そういうわけで、聖霊が臨んできたらば、

5時に敬虔なるユダヤ人ら天下の国々より来りてエルサレムに住み居りしが、6この音おこりたれば群衆あつまり来り、おのおの己が国語にて使徒たちの語るを聞きて騒ぎ合い、7かつ驚き怪しみて言う『視よ、この語る者は皆ガリラヤ人ならずや、8如何にして、我等おのおのの生まれし国の言をきくか、9我等はパルテヤ人、メヂヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジヤ、10フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近き地方などに住む者、ロマよりの旅人――ユダヤ人および改宗者――11クレテ人およびアラビヤ人なるに、我が国語にて彼らが神の大なる御業をかたるを聞かんとは』

これはみんな異言、高次な異言なんです。使徒たちは高次な異言をもって、そこに集まった人たちの郷土の言葉を語らしめられた。彼らは知らない。これまた異常なことです。

インド人のサンダーシングが英語をしゃべったと言ったでしょ。通訳が来ないで、祈っていたら英語になってしまったという。これは高次な異言の世界です。それで、

「神の大いなる御業を語る」

という。これはもう聖霊の権威ですからね。だから、みんな参ってしまう。

●これ何事ぞ

それでも中には、余りに祈りの内容が凄いものだから、

12 **みな驚き、惑いて互に言う『これ何事ぞ』** 13 **或者どもは嘲りて言う『かれらは甘き葡萄酒にて満たされたり』**

「葡萄酒にて満たされたり」と、何か少しおかしい。「驚き惑いて互に言う」と。そこに、

「これ何事ぞ」

とありますね、「これは一体どういうことか」と。

今日、その題にしたんですけれども。私自身、阿蘇で祈ったり、また自分で深く祈ったりした。ある時は、数人の会員を連れて、深山幽谷で断食の集会をした。みんな聖霊を受けてしまって、「これ何事ぞ」ということになった。本当に私自身が、あなた方も体験された方は、

「これ何事ぞ！　どうしてこんなことが起きたか、一体これは何だ」

と。今までの知識、判断を超越したところのものが、未（いま）だ見ざりし、未だ聞かざりし、未だ知らざりしことが起きた。伝道の書にあるように、

「日の下には新しきもの無し」

というが、新しきものがやってきた。これキリストです。新人が現われた。そしてまた、キリストの霊をもって日の下に新しきことが起きた。これが聖霊の降臨です。その他のことは繰り返されているが、これは本当に新しい。この「新しい」というのは、古くならない新しさです、質的に。「新約」の「新」の字、「コイネー」という字が、これがそうですね。「ネオス」でない。質的に古びないところの新しいことが起きた。これが聖霊です。御霊を受けたら、これは何年経っても、何だか知らないけれども、新しいんです、私たちは。決して古びない。いよいよ新しくなる。

「外なる人は破るれども、内なる人は日々新たである」

と。なぜパウロはあんなことを言ったかというと、聖霊におけるところの永遠の生命の、進展してやまざるところのもの、それが日々新たなる、永遠の青年です。キリストは地上において青年の時に天界に行かれましたが、本当にキリストの生命というのは凄いよな。だから、この御霊を受けますと、確かに違います。自分の信仰ではない。いわゆる信仰と言っていた時と違う。私は無教会時代の自分とはっきり違うから、

「もう私は、プロテスタントでも、カトリックでも、無教会でもありません」

と書いた。だから、天野先生〔天野貞祐〕がびっくりさたわけです。皆さん一人びとりが、

「私は、自分の過去とはもう違いました」

と、体験した者は誰でもが、その事を言えるんです。自分の側の問題じゃないんだから、キリストの霊が入ってきたから、正直そうです。いつでも自在なんですよ。

「これ何事ぞ！」

と、皆さん、他の人に言われるような、また自分自身が本当に、「これ何事ぞ」と言って驚くようなことになる。御霊のバプテスマを受けた後で私は聖書を読んだら、

「こんなに聖書には聖霊ということが書いてあったか、今まで何を読んでいたか」

と、自分で驚いたんだ、「これ何事ぞ」と、正直。

信仰が厚いの薄いの、深いの浅いのなんて、そんなことは問題ではなくなってしまった。キリストという実体は無限無量なんだから、それを信ずるのに浅いも深いもないじゃないですか。それを無条件に受けとれるのに、キリストの無限無量のものを測っているんですか、こっち側から。とんでもないですよ、圧倒されるだけです。

「聖書は圧倒され驚嘆して読むべき本なり」

と私は書いたことがある。驚嘆驚倒して読まざるを得ない。

これはみんな一緒になって、心を一つにして、ギリギリのところで十字架の下に平伏して祈ったら、聖霊が来たというわけだ。

ところが、一人違うのがいた、パウロというやつが。これは此処にいなかった。彼はなお、こういう連中を迫害していた。使徒行伝の7章～9章のステパノのところにパウロが出てくる。ステパノというのは御霊のチャンピオンだよな、チャンピオンの一人です。7章のところはステパノの演説が延々と続いている。そうして7章51節に、

「51 **項強（うなじこわ）くして心と耳とに割礼なき者よ、汝らは常に聖霊に逆う、**」（**使徒行伝7・51**）

と。こういうことを言ったもんだから、ステパノは殺されてしまった。「聖霊に逆らう」と言って。御霊に酔えるが如き人にあなた方はなってくださいよ。

「わが神の言に酔えること酒に酔えるが如し」

とエレミヤは言った。我々は神の御霊に、キリストの御霊に酔えること、ウィスキー以上に酔えるが如しと。

「55 **ステパノは聖霊にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に立ちたもうを見て言う、56『視よ、われ天開けて人の子の神の右に立ち給うを見る』……59かくて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』60また跪（ひざま）づきて大声に『主よ、この罪を彼らの負わせ給うな』と呼ばわる。斯く言いて眠りに就（つ）けり。**」（**使徒行伝7・55～60**）

大勝利です、ステパノは。最初の殉教者が、このような盛んなる霊をもって天界を見て、そうして、

「彼らを赦せ」

と、自分を撃った者を。これは本当の勇者でなければ言えない。キリストと同質の勇者とされているんです、御霊の中で。

私たちは、御霊というならば、それだけの本当の勇者、また本当の担う者です。とにかく、御霊は人々を通してのっぴきならない現われ方をしますからね。聖霊と換えるものがどこかにあるんですか。見せてください、あったら。聖霊と換えるものは無いから。何ものとも換えることができないのは御霊なんです。私から御霊を取られたら私は生命はないよ。

「へぇー、そうですか？」

なんて、そんな顔してはダメだよ。

「私もそうです！」

と言わなくては。この聖書の現実に限りなく入って行かなくては。

●本質即現象の根源現象

気は無風であり、微風であり、強風であり、嵐であり、みんな同じ気だよ、これは。空気だよ。大自然を冥想してください。どれにでもなれなくてはいかんですよ。バラを見ればバラとなり、かすみ草を見ればかすみ草となり、カーネーションを見ればカーネーションとなり、松を見れば松となり、何にでもなれるんです。本当に愛というのはそういう世界です。私は説明ができないんだよ、正直。もう姿が無いんだよ。それはキリストという宇宙的な霊を戴くと、こちらも宇宙的な心になる。嵐にもなるし、微風にもなる。

ベートーベンみたいなやつはあらゆる種類の音楽を書いているでしょ。あれはただ天才で技能があるとも言えるかも知れないけれども、彼の魂がそういう魂なんです。乙女の如く、英雄の如く、自在なんです。ゲーテにしても、ダンテにしてもみんなそうです。佐久間象山も大変な人です。あれにキリストの霊が入ったら、大変だったな。

皆さん、いろいろ泣きごともあるかも知れません、問題もあるかも知れません。いいですよ、どうだって。こだわらないでくださいよ。或ることを祈るでしょ、そのことにこだわって結果を思ってではいかんよ。結果はいらんです。もう祈って、地上でもってその祈りの内容がかなえられなくたっていいですよ、そんなことは。一番深いこと、一番高いことは地上の相対的現実では成就しない。これは新天新地が来てからのはなし。

「神さま！　キリストさま！　あなたが最善をなしてくださるから、私の目の黒いうちはどうだってもいいですよ」

と。それくらいの迫力でキリストの中に入ってごらんよ、行き詰まれば行き詰まるほど凄いことになるから。

「我によらずば何事も為し能わず。我に居れ、居れ、居れ」

とキリストは言われた。「居る」とは何ですか、「宿る」とは。

「わが内に宿れ、私はお前のうちに宿る」

とは何ですか。これは聖霊の現実なんです。御霊の内住の世界。いつも言っている通り、

「神―キリスト―我」〔三重の内接円〕

ということ。

もう大抵、皆さん一人びとりに響くものは響いたと思っています。もうけちくさい、相対的な考えは抜けなくては。今の時代は精神的に、霊的に低下している時代だ。それだけあなた方はいよいよ世の流れに逆行して、本当に昔の、神の霊の顕然として現われた時代を、昔を今にして、

「キリストさま！　今、私たちはこのようにして使徒たちと同質の世界を生きつつありますが、いよいよ助けてください！」

と祈りかかれば、もう病だって何だって、みんなすっ飛んで行っちゃうぞ、本当に。そこで、

「これ何事ぞ!?」

というようなことを自分で本当に体験し、人が「これ何事ぞ」と思うような次元の違った世界に我々は入る。聖霊の世界は、「これ何事ぞ」の世界です。これを怪しむのでも何でもない。

「これ何事ぞ。確かに違いました！」

と言って、本当に歓喜して、自分で決定的な、質的な、次元的な相違を感ずるんです、聖霊の世界は。それを一般のキリスト教界においては、それからズレを来しているのが大方である。いいですね、我々は無きが如き姿でありながら、キリストが顕然と現われることになる。

「我を視よ！」

ということが言えるんです。このペテロと一緒に、「我を視よ」と。

「金銀は我になし。しかし、我を視よ。我が内にあるものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め！」

と言ったら、跛者が立ってしまったという、そのように。福音書のペテロと、使徒行伝のペテロが如何に違うかということ。無学の凡人（ただびと）がいわゆる学問の権威以上の権威を持つ。

どうぞ、そういうことですから、老若男女問わず、聖霊の本当の権威は、本当に平伏しの魂に臨んでくるんです。平伏しの魂でなくて、聖霊の権威のような顔をしてたら、下手すると傲慢になってサタンになる。サタンは傲慢の霊だからね、霊的傲慢は最大の罪なんだから。

そういうことで、イエス・キリストを本当に自分の生命として、御霊に生きる。御霊に生きるということは、その聖霊は、使徒行伝においての聖霊降臨は、火をもって象徴されて現象されている事態です。日本の国旗は太陽です、火のかたまりです。驚くべき分裂と融合の作用をしているんだそうだな、原子核は。あのような驚くべき赫々（かっかく）たる光、光熱、引力。これは今度は、私たちは原始力たるキリストという霊体を戴けば、まぁ自分でも想像のつかないようなことが起きて来るわけです。本質即現象の世界が出てくる。根源現象ということを言いますけれども、その外側にも自在に現象して来る。これから祈ります。